

第145回 日文研フォーラム



大庭みな子 「三匹の蟹」
ミニスカート文化の中の女と男

Oba Minako's "Three Crabs":

Mini-Skirt Boom & Gender Relationships



チグサ・キムラ・スティーブン

Chigusa KIMURA-STEVEN

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っていないわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

大庭みな子「三匹の蟹」 ミニスカート文化の中の女と男

Oba Minako's "Three Crabs":
Mini-Skirt Boom & Gender Relationships

● 発表者 ●

チグサ・キムラ・スティーブン
Chigusa KIMURA-STEVEN

ニュージーランド・カンタベリー大学 準教授
Associate Professor, University of Canterbury
国際日本文化研究センター外国人研究員
Visiting Research Scholar, International
Research Center for Japanese Studies



2001年12月11日 (火)

発表者紹介

チグサ・キムラ・スティーブン

Chigusa KIMURA-STEVEN

ニュージーランド・カンタベリー大学 準教授

Associate Professor, University of Canterbury

国際日本文化研究センター外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies

略歴

- 1972年 6月 ブリティッシュ・コロンビア大学日本文学科 卒業 (B.A.)
1974年 2月 カンタベリー大学講師
1974年 6月 ブリティッシュ・コロンビア大学大学院日本文学専攻 修了
(M.A.)
1976年 1月 カンタベリー大学 助教授
1984年 12月～現在 カンタベリー大学 準教授
1994年 6月 カンタベリー大学大学院日本文学専攻 修了 (Ph.D.)

著書・論文等

- ・『三島由紀夫とテロルの倫理』作品社、2004年
- ・『「三四郎」の世界：漱石を読む』翰林書房、1995年
- ・“Reclaiming the Critical Voice in Enchi Fumiko’s *The Waiting Years*,” in *The Outsider Within*, Lanham, Maryland: University Press of America, 2001
- ・The Otherness of women in the Avent-Garde Film *Woman in the Dunes*. In Mostow, Joshua S. Bryson, Norman and Graybill, Maribeth (ed.) *Gender and Power in the Japanese Visual Field*. Honolulu: University of Hawai’i Press, 2003
- ・“Terror in the Art and Lives of Mishima Yukio and Oe Kenzaburo” In: Berendse, G. and Williams, M. (ed.), *Terror in Text: Representing Political Violence in Literature and Visual Arts*. Bielefeld: Aisthesis Verlag, 2002
- ・The Literary Creativity of Heian Women and Their Social Conditions. In: Brown, J. and Arntzen, S. (ed.) *Time & Genre*, Edmonton: University of Alberta, 2002
- ・「姦通文学としての『それから』」『漱石研究』Vol.10、1998年
- ・「叛逆の歴史：『女坂』を読む」『社会文学』No.11、1998年
- ・『「三四郎」における語りの構造』『歌の響き、物語の欲望』神話社、1996年
- ・“A New Approach to the Analysis of the Plot in Kawabata Yasunari’s *Snow Country*,” *NZASIA Occasional Papers* Vol. 3, 1980
- ・“*Hachikazuki*: A Muromachi Short Story,” *Monumenta Nipponica* Vol.XXXII, No.3, 1977

はじめに

大庭みな子の作品は、ボーダレス（無国籍的）な魅力を持っている。特に一九六八年に『群像』新人賞及び芥川賞の両方を獲得した「三匹の蟹」は、大庭がアメリカ社会に對していかに深い洞察力を持つていたかを如実に物語っている。

大庭がアメリカに渡ったのは、一九五九年。大庭は「わたしを相手にしてくれない故郷ならとび出してやれという気分だった」から渡米したといっている。しかしそれは夫の利雄が日本資本でアラスカのシトカに建設されたアラスカパルプの技術指導者として転勤になったから可能になった選択であった。私がこの点を強調したいのは、海外転勤になった夫に妻が同行するというのは、女性史の上でも画期的な出来事であったからだ。それまでは、欧米諸国で暮らすことができた日本人女性の一部の豊かな家系の娘か、政府から送られた留学生に限られていた。むしろ第二次世界大戦が終わった後は、アメリカをはじめとする占領軍の兵士と結婚して夫の国で暮らす戦争花嫁と呼ばれる人々があった。だが日本人と結婚した女性たちが、海外転勤になった夫に同行して外国に長期滞在することは稀だった。ところが日本経済が高度成長期に入ると、企業にも海外で働く社員に妻や子供を同行させるだけの経済的ゆとりがでてきた。大庭夫妻は、いわばその

はしりであった。したがって、大庭のアメリカ行きは、江種満子が指摘したように、日本の「資本主義経済の成長期あるいは爛熟期に遇い得たことが可能にした選択肢だった」²わけである。

ちなみに村上春樹や吉本バナナの作品が海外で人気を博すようになったのも、日本人の生活にゆとりができ、日常の生活様式や人々の意識が西欧化し、それが彼らが描く作品にも反映していることが大きい。言い換えれば、日本文学の国際化は、日本経済の発展と密接な関連をもっている。この点は、大庭の作品を考慮する場合にもやはり視野に入れておかねばならないと思う。

もつとも利雄の転勤先はアメリカ本土ではなく、アラスカにあるシトカという小さな町であった。だが作家志望の大庭にとって幸運なことに、辺鄙の地ではあっても、シトカは先住民民族である「インディアンと、最初の植民者であるロシア人と、ロシアからアメリカ合衆国が購入してから流入した多様なアメリカ人、というふうに多人種・他民族による集合的な文化世界ができあがっている」³コスモポリタンな町であった。

大庭が書いた随筆や作品を見れば、彼女はそこで実に多様な住民と親交を結んでいたことがわかる。彼らの名前が本名かどうかは明らかではないが、ニュージールランド生まれで元看護婦のメアリー、少年の時ロシア革命に出会い、父親につれられてロシアを脱

出した画家のアンドレア、同じくロシア人で声楽家のマリア、ポーランドから来たミーチャとヤダーシユカ夫婦などとは、一緒に釣りやブリッジなどをするだけではなく、個人的な問題についても相談しあえる仲であった。ちなみに柄谷行人は、コーネル大学で近代日本史を教えているシトカ出身の学者の母親が大庭と親友で、その学者は大庭から少年時代に日本語を学んだことがきっかけで、日本に興味をもつようになったと話してくれたと記している。

大庭はまたさまざまな機会を通して、トリリングット族などのインディアンの人々とも交流があった。「三匹の蟹」で主人公の由梨が一夜を共にする「桃色シャツ」を着た男が、四分の一トリリングットの血が混じっているという設定も、大庭がトリリングットの人々に対して親しみを抱いていたことを物語っている。

大庭はむろんシトカにのみ閉じこもっていたのではなく、家族と共に度々アメリカ本土へも旅行し、見聞を広めている。そして一九六二年には、仕事で動けない夫を残して、ウイスコンシン州立大学美術科の大学院生としてマジソンにも住んだ。さらに一九六七年には、シアトルにあるワシントン州立大学美術科に在籍し、そこでは主に文学の講義に出ていた。そのような長期に渡る大学生活を通じて、大庭はアングロサクソン系米国人と親交を結んだだけではなく、さまざまな国から来ていた留学生たちとも親しくなっ

た。そのような体験が、大庭の国際的感覚に一層みがきをかけることになったようである。

大庭が小説を書きはじめたのは、十代のときからで、利雄とも小説を書きつづけることを条件に結婚している。しかしW大学大学院で油絵を学んでいる日本人留学生を主人公とした最初の作品「構図のない絵」は、一九六三年ウイスコンシン州立大在籍中に執筆。二作目の「虹と浮橋」を完成させたのは一九六七年、ワシントン州立大に在籍中のことであつた。そしてその年の秋シトカに戻ると、短期間で「三匹の蟹」を書き上げ、「群像」新人賞の応募作として日本に送っている。その選択は大あたりで、「三匹の蟹」は一九六八年度の『群像』新人賞を獲得しただけでなく、同年上半期の芥川賞も受賞した。その直後に「構図のない絵」と「虹と浮橋」も出版された。それによって大庭は職業作家として華々しいスタートをきったわけで、大庭文学はアメリカ在住の経験なしには生まれなかつたといつてもよい。

「三匹の蟹」が画期的だつた理由はいくつかあるが、その一つは主人公が産婦人科医の夫とアメリカに在住して数年になる専業主婦となつてゐることである。そのような主人公の出現は、先に大庭自身についても言及したように、日本経済の発展抜きには考えられないことであつた。その意味で、主人公由梨は、日本が豊かな資本主義社会の仲間

入りをしたことを象徴する存在だといっても過言ではない。むろんそれは産婦人科医をしている由梨の夫の武や、物理学者の横山とその妻などについてもいえることである。

ただし「三匹の蟹」が日本の文壇に一大センセーションを巻き起こしたのは、由梨が「桃色シャツ」を着たゆきずりのアメリカ人と一夜を過ごすという出来事であった。そこでまずこの事件はどのような意味をもっていたのか、当時のアメリカの状況なども参照しながら論じていきたい。

性の革命とミニスカート文化

文庫本として出版された「三匹の蟹」の解説の中で、リード英雄は次の様に指摘した。

「三匹の蟹」がセンセーションを巻き起こした二十五年前の批評、特に群像新人賞や芥川賞の選評に目を通すと、「桃色シャツ」が「アメリカ人」や「外人」を具現し、日本人の日本人妻由梨がその「アメリカ人」、あるいは「外人」と「姦通」したことに「衝撃」の大半があったように見える。⁵

リービは続いて当時の審査員だった人々の選評をいくつか抜粋して紹介しているが、その中には例えば次の様な評がある。

大庭みな子さんの「三匹の蟹」は、気が利いたショッキングな作品だ。この人妻はずでに外人と寝たことがあり、浮気するならあとくされのない男をさがせと友達に忠告するような女である。(丹羽文雄)

アメリカ居住の日本人の夫婦者……

その妻は……一人家を出て、夜景の遊園地に行つて、初めて出合ったヘンなゴロツキの若い男と共に遊園地で時間を過ごして、しまいに若い男の車で海岸に行つて、三匹の蟹という赤いネオンの曖昧宿に入る。(龍井孝作)

確かに選者たちがいうように、由梨はアメリカ人と性的関係があつた。だが厳密に言えば、由梨はアメリカに住んでいるわけだから、彼女の方が「外人」と呼ばれるべきであるが。実はそれよりも重要なのは、これらの選者、そしてリービ自身も、由梨が夫婦以外の間の性的な関係が大びらに認められている社会の中で暮らしていたという点を見

逃していることである。

由梨と武が開いたブリッジ・パーティに招待されている男女、すなわち物理学者の横田とその妻、アメリカ文学を教えているフランク、バラノフ神父と妻のサーシャ、それに画家で教師のロンダは、実は非常に入りくんだ関係にある。武は歌手でもあるサーシヤと浮気を楽しんでいるし、由梨もフランクと寝たことがある。もともと由梨はフランクではなく、その前に関係のあった男性に今なお心惹かれているが。重要なのは、由梨も武もお互いの浮気に気がついていて、時折皮肉を言い合っている。重要なのは、由梨のように気があるわけではないことである。一方サーシャは無神経で気の良い夫を無視して武とだけではなく、これまでにも多数の男性と性的関係を結んでいるし、由梨の相手のフランクの方は既に離婚していて、目下はやはり離婚して二人の子供を育てているロンダとつきあっている。ところがロンダはシカゴから仕事できていた技師と親しくなり、技師と週末を過ごすためにシカゴへ行こうと計画している。

由梨はそのように性的に放縦な社会で暮らしていたわけであるが、ここでもう一つ考慮しなければならないのは、当時のアメリカでは「ワイフ・スワッピング」(妻の交換)、または「キー・パーティ」と呼ばれる現象が広がっていたことである。

「ワイフ・スワッピング」については、桐島洋子がさまざまにアメリカ紀行文で紹介

しているが、それは文字通り、男たちが他の男の妻と性を楽しむことを意味していた。「キー・パーティー」の方は、パーティーに集まった男性たちが車の鍵を容器に入れると、妻や同行の女性たちが思い思いにその鍵を選び出し、鍵の持ち主とセックスを楽しむという一種のゲームであった。このようなゲームは、一九七三年の東海岸の小都市を舞台にしたリック・ムーデイの小説『Ice Storm』（氷嵐）の中にも描かれている。ただしムーデイの小説が出版されたのは一九九四年で、一九七〇年代には十代だった主人公が当時の両親たちの生活を回顧する形式になっている。そしてこの小説は台湾出身の監督アン・リーによって一九九七年に映画化され、映画の出来がよかったこともあって、「キー・パーティー」も、一九七〇年代初めの虚無的なムードを反映した現象の一つとして改めて注目を浴びることになった。

ちなみに大庭が「三匹の蟹」を書いた一九六七年には、マイク・ニコルズ監督の「Graduate」（卒業生）という映画も発表されている。この映画は日本でも話題を呼んだようだが、ダステイン・ホフマンが演ずる大学を卒業して間もないベンジャミンという主人公の青年が、母親の知り合いである中年女性、ロビンソン夫人に誘惑される話である。ベンジャミンはそのうちロビンソン夫妻の娘エレインを愛するようになり、夫人から離れていくわけだが、夫人がそれまでも数多くの情事を楽しんできたことや、ベン

ジャミンが去つても、また後釜をみつけるであろうことがわかるように描かれている。

大庭はそのようなアメリカ社会の性的風俗を、「三匹の蟹」で作品化しているわけだが、しかしアメリカも、常にそのように性的に奔放な社会だったのではない。少なくとも女性に関する限りはそうであった。それが変化した一つの要因は、一九六一年に経口避妊薬（ピル）が市販されるようになったことである。

それまで女性は、既婚や未婚の有無にかかわらず、妊娠への恐れからセックスには男性のように積極的ではなかった。また既婚女性が夫以外の男性の子供を身ごもれば、社会から排斥されることも覚悟しなければならなかった。文学作品を見ても、例えば、名作といわれるナサニエル・ホーソンの『緋文字』は、年老いた夫が何年も不在の間に自分と同じ年令の独身の牧師と恋におちたヘスターが、妊娠したために姦通罪に問われて投獄され、釈放された後も姦通の罪を示す緋文字を常に胸につけて暮らさねばならぬという話が描かれている。それは過去のことを描いたフィクションであった。けれども、アメリカ社会でも姦通を犯し、妊娠した女性は社会的制裁を覚悟しなければならなかった。むろん未婚の母も排斥された。

そのように女性の性的自由が束縛されていたのは、家父長制を守るためであったが、日本でも戦前までは既婚女性が夫以外の男性と性的関係をもつことは犯罪であった。姦

通を描いた小説も発禁になったりした。しかし一九四七年に姦通罪はなくなり、それとともに、大岡昇平の「武蔵野夫人」（一九五〇）などのように、既婚女性の婚外恋愛を描いた小説が登場するようになる。

それでも姦通という言葉には反社会的なイメージがつきまわっていたが、そのようなイメージを変えるのに一役買ったのは、三島由紀夫の小説『美德のよろめき』（一九五七）であった。この小説では年上で金持ちの男と結婚した主人公が昔の恋人に再会し逢瀬を重ね、妊娠すると三度も中絶する話だが、三島はそれを「美德のよろめき」という洒落た表現に変えたわけである。それが大当たりし、「美德のよろめき」という言葉はたちまち流行語になり、妻が夫以外の男性と性的関係を持つことが罪だという考えは薄れていく。最近ではそのような関係は不倫と呼ばれているが、その言葉の持つ道徳性を抹消するために、「プリン」とカタカナ書きされることすらある。

また日本の場合、女性が性的に自由に行動するようになった背景には、姦通罪がなくなるのと前後して、妊娠中絶も簡単にできるようになったことがあった。そのような状況を反映して、小説でも女性が中絶する話がでてくるようになり、三島の『美德のよろめき』では、主人公は妊娠すると三度も中絶する。しかも悩むことなく簡単に中絶する。その意味で、この小説は「中絶天国」と呼ばれる日本の状況をよくとらえているといえ

よう。

おそらく日本ではこのように妊娠中絶が簡単にできたため、政府が経口避妊薬ピルの市販を許可しなくても、女性は性的に自由に行動できたのであろう。しかしキリスト教の影響が強い国では、一九六〇年代のはじめには法的に中絶を禁止しているところが多く、アメリカでもそうであった。また欧米諸国では、女性たち自身も、やはりキリスト教の影響で、中絶に罪悪感を抱くことが多かった。

したがって経口避妊薬ピルが簡単に手に入るようになったことは、女性たちにとっては画期的な出来事だった。むしろ避妊の方法としてはコンドームもあった。けれどもコンドームは、男性の協力なしには出来ない避妊法である。ところがピルは、女性が自分の意志のみで避妊することができるようにした。つまりピルの出現は、女性が男性から性的に自立することを可能にしたのである。

ただしその反面、ピルの出現によって、女性たちは、男性たちから（妊娠の心配がないのだから、自分たちの性的欲求に従ってもいいじゃないか）という圧力をかけられるようにもなった。そのようなピルのもたらした否定的な面も、むしろ認めねばならない。しかしピルの出現によって、妊娠の恐怖から解放された女性たちが性に対して積極的になったことは確かであった。

そのようなピルの効能と共にもう一つ留意しなければならないのは、女性たちがミニスカート文化の広がりなどによって、自分たちを縛りつけていた旧来のモラルからも自由になっていったことである。

誰がミニスカートの発案者かについては議論がわかれていて、一説では、一九六五年冬におこなわれた春と夏のファッション・ショーで、パリのオートクチュールのデザイナー、クレージュが、膝上十センチのミニスカートと白いブーツのモデルを登場させたのが発端だったといわれている。そしてクレージュの「ショーが終わったときには、観客の心も、それを身につける女性たちの心まで解放していた」という。

一方ロンドンでも、新進のデザイナー、マリー・クワントがそれよりも短いミニスカートを発表して有名になっていた。クワントは自分が着たいと思う服を作ったと述べているが、クワントの服はたちまち若い女性の心をつかみ、世界中で大人気となった。それでクワントの方が「ミニ」の元祖または「ミニの女王」として知られるようになり、一九六八年には英国に巨額の外貨をもたらした功績を認められ、エリザベス女王から「英帝国勲章」を授けられている。

ミニスカートは、もちろんアメリカでも大流行したが、大統領夫人のジャックリン・ケネディーが公式の場でミニをはいたことが、ミニの流行に一役買ったといわれている。

周知のように日本でも、ミニスカートの大はやりだった。「ミニスカートが中高年女性も巻き込んで日本で爆発的に流行するのは翌六八年からだ、六七年にすでに街の風俗として定着していた¹⁰」という。ミニの流行に拍車をかけたのは、一九六七年の十月、クワントが十八歳のモデル、ツイギーを伴ってやってきて、国技館でファッション・ショーを開いたことであった。その時、八千五百人もの観客が国技館につめかけ、その中には一目ツイギーを見ようとやってきた男性も多数いたという。¹¹

クワントのミニスカートが革命的だったのは、一つには、ファッションを誰にでも手に入れる値段で提供したことであった。それまでは、ファッションを楽しめたのは、金持ちの女性たち、特に裕福な中年女性に限られていた。そのためにそれを着ると、若い女性でも「少なくとも三十五歳には見えた¹²」。ところが若いクワントは、若い女性に似合う服を、彼女たちが自分のサラリーや小遣いで買える値段の服を売り出したのである。それは中年の女性たちにも受け、クワントの店では、安い給料で働いている若い女性たちと金持ちの中年女性が一緒に買い物をする風景が見られるようになった。つまりファッションによる民主化である。事実クワントはインタビューで、「ファッションの本質は民主主義。大事なことは、つくる側が、一方的に命令する独裁を拒否することと既成概念から自由になることです」と語っている。

女性はまたミニスカートの誕生によって、従来のきつちりとセツトされた堅苦しい髪型や、体をギュウギュウ締め上げてウエストを細く見せるコルセツトなどからも自由になった。パンテイストッキングができると、動きにくいガードルからも解放された。これもミニが女性たちに受けた理由の一つであった。それまでは、ファッションは中年の裕福な女性たちのためにデザインされていたから、高価なだけではなく、軽快に動きまわれない服が多くしかもそれを着ると、若い女性でも中年のようにふけて見えたわけである。ところがミニは、女性たちを若々しく見せただけではなく、活動的にした。ミニと共にローヒールの靴やブーツが流行するようになったことも、女性たちの行動を活発にするのに一役買ったといわれている。

ちなみにミニスカートが流行すると、男性たちの間でもファッション革命が起きていく。ビートルズの影響で長髪が増えてきただけではなく、彼らはさまざまな色やスタイルの服を着るようになり、由梨の情事の相手の「桃色シャツ」のように、ピンクのシャツを着る男性も増えた。そのため「ピーコック革命」という言葉が流行ったりしたが、そのような男性のファッションの女性化から、ジーンズやTシャツなどのユニセックスなファッションが生まれてくるのである。

重要なのは、そのようにファッションが変わると、女性たちの意識も変わったことで

ある。つまり旧来の堅苦しい服を脱ぎ捨てると、女性たちは自分たちを縛りつけていた過去の習慣も脱ぎ捨てて、自由な生き方をするようになったのである。

それに対しては非難の声もあったが、クワントは、自分の服が女性の意識を変えたのではなく、新しい生き方を探していた女性たちがミニの流行を生み出したのだと反論した¹³。ちなみに、私もその当時ロンドンで美術やデザイン関係の仕事をしていたという英国人の伝記作家に会ってその頃のことについて聞く機会があったが、彼も自分の周りの女性たちが新しい生き方を模索している時に、ミニがでてきたのだと語っていた。

つまりミニは、「新しい生き方を模索していた女性たちの心をつかみ、彼女たちをいきいきさせ、女であることに誇りと自信を持たせた」¹⁴わけだ、そこにはファッションと人間の心理との間に密接な関係があることがうかがわれる。

むろんその頃には、経口避妊薬ピルも簡単に手に入るようになっていた。それらのことがあいまって、女性たちも男性と同じく性の自由を楽しむようになっていく。

その後、ベトナム戦争に反対し、平和と自由と愛の自然をもとめたヒッピーやフラワー・チャイルドといわれる若者たちの出現によって、フリーセックスは、若者文化の一部として定着していった¹⁵。一九六九年にジョン・レノンとヨーコ・オノがアムステルダムやモントリオールで戦争よりも愛をとというメッセージを伝えるために公共の場で「ベ

「ツド・イン」するのも、そのような若者文化を象徴する出来事の一つであった。もともと二人はただ一緒にベッドに入っていただけだが。

そうした若者文化の影響で、既婚者の性のモラルも急速に変わり、離婚も増えていった。そしてアメリカでは「ワイフ・スワッピング」や「キー・パーティー」のような退廃的なゲームを楽しむ人々もでてきたわけである。

「三匹の蟹」の登場人物たちはそこまで退廃的ではないが、大庭が彼らを当時のアメリカ社会の縮図として描いていることは明らかである。

とはいえ、大庭はそのような性の自由をささえていた経口避妊薬ピルについては直接は何も言及していないが、しかし作中の女性たちが簡単に不倫をしたり恋人を取り替えたりするのも、ピルを飲んでからこそだという風に読める。また由梨が妊娠したかも知れないといっても武が信じないのも、やはり彼女がピルを飲んでいるのを知っているからであろう。むしろ彼らの避妊の手段がコンドームだと読めないこともない。だが由梨がフランクや、見ず知らずの「桃色シャツ」とも簡単にセックスを楽しむのは、やはりピルを飲んでいるからだという風に読める。逆にいえば、「桃色シャツ」が簡単に由梨を誘うのも、他の女性たち同様、由梨もピルを飲んでいると考えたからだと思えることができる。

もつとも由梨は、「桃色シャツ」に「どうして、ミニ・スカートををはかないの？」と聞かれると、「だって、きれいな脚じゃないもの」¹⁶というので、ファッションの上では、当時の流行に迎合しているわけではない。けれども彼女もミニスカート文化と経口避妊薬・ピルがもたらした性の自由は、たつぷりと楽しんでいるといえる。

このように六十年代後半に顕著になつてきたアメリカ社会の性に対するモラルの変化を考えれば、由梨が「桃色シャツ」と一夜を共にするのは決して突出した行為だとはいえないことがわかるであろう。¹⁷

「台所症候群」と由梨

大庭は「三匹の蟹」では、いくつか別のテーマも追求している。その一つは、後に日本で「台所症候群」と呼ばれるようになる主婦たちの神経症についてである。

由梨は専業主婦で、子供は十歳の梨恵一人。自分の車を持ち、週末には自宅に友人たちを迎え、ブリッジ・パーティを開いたりする優雅な生活をしている。自宅で二組のテーブルを置いてブリッジをするくらいだから、居間も広いだろうし、台所もケーキを焼いたりできるモダンなものであろう。そのような由梨の生活は、当時の日本の主婦たち

からすれば羨ましいほど恵まれた生活に見えたに違いないが、しかし由梨はそのような生活にうんざりしきっていた。

由梨はお菓子の粉を混ぜ合わせながら、胃の奥の方で微かな痛みを感じた。彼女は機械的に卵を割りほぐし、バターをこね合わせ、ベーキング・パウダーや塩をふり入れながらまるで悪阻の時みたいに生唾が咽喉元まで上ってくるのを感じた。¹⁸

由梨が吐き気をもよおすほど嫌悪しているのは、実は自分の生活そのものである。これは彼女が夫や娘と交わす会話によつてしだいにわかつてくる。ブリッジ・パーティを開こうというのも、実は夫の提案だった。由梨自身はお客のためにケーキを焼いたり、ブリッジ・パーティをやることに飽き飽きしていた。

そして客が集まつてきて会話が始めると、なぜ由梨がそのようなパーティに嫌悪感をおぼえているのかわかつてくる。彼らは皆、何とかして相手よりも気の利いたことを言おうとやっきになつていて、辛辣なことばかりしかいわないし、相手をほめる場合にも、お世辞であることが明らかな見え透いたほめ方しかせず、本音で話す者は誰もいなかった。

実はこの会話だけで構成されているパーティの場面は、「三匹の蟹」の中でも特に秀逸な箇所だいう定評がある。『群像』新人賞の選考委員の一人江藤淳は、E・オールビの『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』と類似しているけれども、それは作者の体験にもとづいて描かれたものであるとも指摘している。¹⁹ またもう一人の選考委員の大江健三郎も「それぞれの『他者性』を明瞭にきわだたせた」優れて「演劇的」な会話だと評価している。

確かにその通りである。しかし私は、大庭がこの場面を舞台劇のように構成したのは、それぞれの人物がインテリにふさわしい役を演じようと躍起になっており、彼らの間では心の通った真のコミュニケーションが失われていることを、構成の上でも示すためだったと考える。

むろん由梨自身も決して本心を見せず、客に負けないほど辛辣な発言をする。しかもサーシャと親密な関係にあることを大ぴらに見せつけていた「武の視線にぶつかると」、急に横田によりそうようにして、「横田さん、あなたって、ほんとに詩人。フランクはね、フォークナーの研究家ですけど、あれ程詩人じゃないひともないわよ²¹」と、芝居気たっぷりの見え透いたお世辞をいって、横田の気をひこうとする。

ただし由梨が彼らと違うのは、「自分の無意味な言葉と一緒に、生あくびが泡みたい

に胃の奥から上ってくるのを感じた」というように、つい無意味なことをいってしまふ自分に嫌悪感を抱いていっていることである。だからこそ由梨が口実をもうけて、パーティを抜け出そうとすることにも同情できるのである。

由梨が、サンフランシスコにいる姉が飛行機の乗り換えで、この町に来るけれども短時間しかいられないので、飛行場まで会いに行かねばならないといい、その口実が信憑性を持っているのは、前にも指摘したように、日本経済の高度成長によって海外在住の日本人が増えたということが背景にある。

そして車を走らせて遊園地にでかけた由梨は、そこで「桃色シャツ」の男と一夜の恋の авантюール を楽しむわけである。

このように自分の生活を吐き気をもよおすほど嫌悪し、性的冒険をおいかける由梨のあり方は、実は一九六三年にアメリカで出版されたベティ・フリーダンの『*The Feminine Mystique*』（直訳は『女らしさの神話』だが、日本語訳の題は『新しい女性の創造』）に報告されている専業主婦たちの悩みや行動と非常によく似ている。

フリーダンは自分の卒業したスミス大学の同期生にアンケート調査したことをきっかけに、経済的には恵まれた生活をしているアメリカの専業主婦たちが、夫や子供の世話だけに明け暮れる生活に満足感をえることができず苦しんでいる実体を明らかにした。

中には「生きているような気がしないのです」とか、「疲れきった感じで……自分ではっとするくらい子供たちに腹がたつのです……わけもないのに泣きたくなるのです」と訴える女性もいた。また結婚するために十九歳で大学を中退した四人の子持ちの主婦は、「私は子供も夫も自分たちの家も愛している」「しかし私は絶望し切っている」「私って一体誰なのか」と訴えてきた。しかも「大勢の女性が、手足に、出血するおおきな水ぶくれができた」²³ 経験を持つていたが、それは神経的なものからくる疾患だった。フリーダンの調査でもう一つわかったのは、このような悩みをもつ主婦たちの多くが、セックスをしている時だけが、自分が生きていると感ぜられる瞬間だと返答したことであった。このように「郊外住宅の主婦が、近所の男性や知らない男性に、すすんで身をまかすようになり、夫を自分の家の家具のように考えるようになったのは、彼女たちが自己と生きがいを見出す必要にせまられているからだろう」²⁴と、フリーダンはいう。

ちなみに裕福な中流階級の家族に焦点をあてた前述のムーディの小説でも、専業主婦の一人は近所に住む男との不倫にふけり、性にあまり関心のないその男の妻は、心の空虚さを、万引きをやってそのスリルを味わうことで埋めている。男性であるムーディは、フリーダンとちがって、専業主婦たちの苦悩自体には全く同情を示していないが。

興味深いのは、日本でも満たされない思いで暮らしている主婦たちの中には、売春行

為に走るものもいたという。例えば、一九七〇年の『朝日ジャーナル』に掲載された「身もだえする幻想」という記事にはこうある。

東京を中心にした、あるコールガール組織を摘発してみたら、そのグループの三分の二が家庭の主婦、全員が三十歳代で、ほとんどが十歳以下の子どもがいる家庭だった……昨年摘発された中にも中央官庁の高級官僚の妻、某出版社幹部の妻などがあったという……彼女たちは売春をするようになった原因として「家にとじこもっているのが退屈だった」、「こづかい銭がほしくてグループに入り、そのまま抜けられなくなった」、「性的不満」などをあげている。²⁵

そしてこの記事に書き手である男性は、無聊に苦しんでいる新婚の若い女性から受け取った近況報告の手紙を紹介しているが、その手紙には次のように書かれていた。

結婚して半年たちますが、あまりに暇で頭がヘンになりそうです。せめて子供ができるまでも働きたいと思いますが、気の優しい主人なのに、パートタイムでも「絶対いかん」と認めてくれません。仕方なく家の隅々まで念入りにお掃除をし、

なるべき遠くへ毎日のお買い物をしに出かけるようにしています……これでいいのかと、毎日毎日自分に同じことを問いかけては日を送っています。²⁶

この記事の筆者は、「彼女に不幸の意識はない。むしろ逆で、いいひとと結ばれて大変幸せだと思っている。あるいはそう思い込まされている」が、「夫婦の愛なる幻想が崩れ、日常のルーティンが彼女を支えなくなったときはどうなるか」と、疑問を投げかけ、「主婦売春は、もてあましている暇を埋め、ポケットマネーを稼ぐことができ」、「かなり多くの主婦が売春行為に走るチャンスをもつてはいるのではあるまいか」²⁷と問いかけている。

このような記事を見れば、日本でも「主婦幻想」にからみ取られ、夫や子供たちの世話や家の管理以外に生きる場をもたないために苦しんでいる女性たちが多く、中には売春行為に走る主婦もいたことがわかる。

フリーダンは、そのような女性たちの不満や悩みは、「夫や子供を通して自己を確認することは出来ないし、毎日の家事からも自分を見出せはしない」²⁸ことを明らかにしている指摘。そして女性たちが満たされない思いに苦しむようになったのは、第二次世界大戦後戦場から帰った男性たちに職場を提供するために、政府や学者やマスコミが

「婦人は家庭に帰れ」と奨励し、女性の幸せは家庭にあるという神話をつくりあげたことと深い関連があるという。そしてフリーダンは、女性たちが自分の生活を意義あるものにするためには、何よりもまずつくられた女らしさの幻想を碎き、自らの人間としての能力をのばしていかねばならないと指摘した。

フリーダンの本の『女らしさの神話』という原題はそこから来ているのだが、この本はたちまち女性たちの心をつかみ、大ベストセラーになった。そしてそれは米国における女性解放運動の生まれる契機をつくり、フリーダンは一九六六年に成立した全米女性連盟の初代会長に推された。その時連盟の初代委員長に選ばれたのは、大庭が学んだウイスコンシン大学継続教育部部長のキャサリン・クラレンバックであった。

ジョンソン大統領はそのような女性たちの影響を受けてその年、つまり一九六六年に、「アメリカの女性の能力を十分に活用しなかったことは、わが国にとつて、最も悲しい、かつおろかな無駄である」、だから「女性が専門職につける機会を多くする方法を、大統領に助言するためのスタディー・グループを構成するよう命じ」、ハンフリー副大統領も、女性は「基本的人権を認められていない多数」だ、「アメリカが過去において、女性の能力、才能を無視してきたことは恥ずべきことだ²⁹」と述べている。

大庭が「三匹の蟹」を書いたのは、アメリカにそのような新しい動きが出て来た時で

あった。そこで大庭は、フリーダンの本を読んだり、全米各地に支部を持つようになっていたフリーダンが会長をつとめていた全米女性連盟のことを知っていたのではないか。全米女性連盟の初代委員長は大庭がかつて学んだウイスコンシン大学の人でもあるし。そう思って、大庭の著書を調べてみた。

すると全米女性連盟については何も記されていないが、「黄杉 水杉」（一九八九）の中で、大庭はこう述べている。「ベティ・フリーダンの女性論を読め読めとしつこくわたくしにすすめたのはオリガだった。ポーヴォワールに一足遅れて、世界の女たちをひきつけた人だった」、「その頃——わたしもオリガも二十代の頃、わたしたちはよく男の話をして長い白夜を過したものだ」、「二十代で二人の子供を連れて夫と別れたオリガは、当時としては勇気のあるフェミニズムの先駆者といったタイプの女だった。というより、そういう体験、妻と幼い子供を紙屑のように丸めて放り出し、酒浸りになる男と結婚した運命がフェミニニストにしたのであろう³⁰」と。

「黄杉 水杉」は自伝ではなく、小説である。だから「わたし」をそのまま大庭だとみなすわけにはいかないが、そこに登場する人物たちは、大庭が二〇〇二年にシトカを訪問した時の紀行文にも出てくる。したがって「わたし」という登場人物には、大庭自身³¹の体験が投影されていると見てもいいであろう。

いずれにしろ大庭がフリーダンの本を読んでいたことは確かである。だから「三匹の蟹」でも、主人公の由梨が、フリーダンのいう「得体の知れない悩み」に苦しんでいるという設定をとったのであろう。なおそのような症状は後に「suburban neurosis」（郊外神経症、しかし日本では「台所症候群」と名付けられるようになるわけだが、由梨が憂さ晴らしに、性のアバンチュールを楽しむのも、フリーダンの本の内容とよく似ている。

ただし「三匹の蟹」は、フリーダンが会長をしていた女性運動についてはふれられていず、かわりに女性たちがまだ連帯せず、孤立したままでいる状況をとらえた小説である。それが最も顕著なのは、ロンダが「ユリ、淋しいのよ。そうでしょう。淋しいのよ。困ったことねえ」と訴えても、由梨は耳をかさず、「どうにもならないわねえ。どうしようもないわねえ。じゃあ、又。ロンダ、——愉しんでいらっしやい」と振り切って出ていく場面である。つまりロンダの方は自分たちの置かれている現状への不満を由梨と語り合い、淋しさを分かちあいたいと思っており、女同士の連帯を求めているが、由梨はまだ同性と連帯したいという気持ちは持っていないわけである。それは由梨がまだ男性とのロマンティックな対幻想にとらわれているからだ、しかしそのような対幻想が破られれば、由梨もロンダと淋しさを分かちあい、連帯する可能性をもっているという

ことでもある。

事実小説の展開を見れば、由梨のロマンティックな対幻想は、ロンダと別れた後出かけた遊園地で出会った「桃色シャツ」の男に置き去りにされたことで破られるという風に話が進んでいく。

おとぎ話への挑戦

「三匹の蟹」が画期的な作品である理由はもう一つある。それは女性が自己を変革し、独自の人格を形成していくには、何よりもまず王子様と王女様が結婚して目出たし、目出たしで終わるおとぎ話がつくり出す結婚幻想から自由にならなければならぬと示唆していることである。それは由梨がケーキを焼きながら次のように武と娘にいうことによつて明らかにされている。

「子供の前では、甘い優しい創り話。きれいなお姫さまと凜々しい王子さまが恋をして、ガラスのお城に棲んで、夢の綿菓子を食べ、タララララ³¹」

このようなおとぎ話に対する由梨の皮肉な態度は、武との結婚生活が、子供の時に聞かされた王子さまと王女さまが恋をして結婚して目出たし、目出たしで終わるおとぎ話の結末とはかけ離れていることへの不満からきている。これは武との刺々しい会話に表明されているが、由梨がおとぎ話にこだわっていることは、梨恵を相手に次のようにいうことでもわかる。

「松浦嬢には性的魅力があるとか、サーシャはバラノフ神父の奥さまで、パパの女友達だとか、ママはそういうお客を呪いながら、お菓子をつくっているとか。あーあー、お菓子の中から、ぱつと黒い鴉が十羽もとび出したら、ふっふ。タララララ」³²

由梨はそのお菓子で「サーシャと松浦嬢を豚のように肥らせ」³³るのが望みだというのだが、「呪い」をかけるというのは、おとぎ話には欠かせないモチーフの一つである。またお菓子から鴉がとび出すというのも、英語圏の子供むけの物語からきている。

そのような由梨のおとぎ話にたいするこだわりは、彼女がいまだにおとぎ話、特に王子さまと王女さまが恋をして結婚し目出たし、目出たしで終わる話の影響を受けていることを示すものである。だから武に愛想をつかした由梨は、新しい王子さまを求めて遊

園地に出かけていくのである。

元來遊園地は子供の遊び場であつたが、ここでは由梨が子供の時よく聞かされたおとぎ話の世界に戻り、新しい王子に出会いたいという願望を実現させる場である。これは九時をすぎた夏の遊園地は、「手をつないだ恋人達がネオンのついた乗物を幸福そうな眼つきで眺めてい」る世界であり、モーター・ボートの中にも「ハンドルに、倅せそうにもたれかかつて水のしぶきを放心したような眼で眺めている恋人達」がいたり、どこを見ても恋人達ばかりであることによつて示されている。しかも遊園地の中にあるオペラ・ハウスで上演されているのも、「マゴット・フォンテンの白鳥の湖」であつた。いうまでもなからうが、「白鳥の湖」もおとぎ話によく似ていて、魔法で白鳥に姿を変えられた美しい王女が、勇敢な王子の愛によつて魔法をとかれ、王子と無事結ばれて目出たし、目出たしで終わる話である。それゆえ、これも自分を救つてくれる王子にめぐり会いたいという由梨の願望を示している。

そして由梨は、遊園地の中にある「アラスカ・インデアの民芸品の展覧会場」の管理人をしている「桃色シャツ」の男と出会うわけである。このロマンティックな色のシャツを着た男が王子の役を与えられていることは、おとぎ話の王子のように名前を与えられていないことを見ればわかる。男が背が高く、若白髪はあるけれども黒い髪で、

「眼は緑色に近い碧眼³⁴」だという設定も、ロマンティックな恋物語の「トール・ダーク・ストレンジャー」（背が高く、髪が黒く、異邦人）というヒーローの典型像をふまえて造型されていることが明らかである。

男が「四分の一、エスキモーで、四分の一、トリンギットで、四分の一、スキーディッシュで、四分の一、ポール³⁵」の混血であるのも、彼が由梨の望む理想の男性であることを示している。これは由梨が純粋の日本人である武やアングロサクソン系のフランクにうんざりしていることを見ればわかる。

武はエゴイストで毒舌家であり、機会さえあれば由梨をこきおろす。ブリッジをやるというのも武の発案であり、「悪いけど、わたし、とつても胃が痛くて駄目だから、誰か、もうひとり招んでよ³⁶」と由梨が懇願しても、武は心配する気配は見せなかった。それで由梨が口実を設けてパーティを抜け出そうとすると、「君は大体傲慢だ。君が他人に我慢すると思うのは自分が秀れている、と思うからだ³⁷」ときめつけ、由梨が「わたし、ほんとうに駄目なのよ。痛か、若しかしたら、子供ができたのかも知れないわ」といつても、冗談としか受け取らない。しかもフランクが来ると、「ユリは最近、しきりに胃が変だというんでね、妊娠したのではないかと思っっている」と他人事のようにいつてのける。またフランクに対して、相手の痛い所を容赦なく攻撃し、「ロンダは先週、シ

カゴから来た道路設計の技師と夕食をしてたぜ。自分の家に招んだんだ。残念ながら彼氏が何時にロンダのアパートから帰ったか、見た奴は無い³⁸などという。それは由梨がフランクと寝たことがあるのが気に喰わないからだ、自分はサーシャと仲のいいところをみせつけたあげく、こういった。

「サーシャ、済みませんが、由梨にカルメンがホセをのしるところの、タラララ、という節の正確なところを教えてやって下さいませんか。僕にはどうも四分の一音狂っているような気がしてならないんだけど³⁹」

由梨は即座に、「武、公衆の面前で妻を侮辱するのは離婚の時の慰謝料の額にひびきますよ⁴⁰」とやり返したが、武が思い遣りにかけていることは明らかである。

一方フランクも、由梨にこそ手厳しいことはいわないけれども、ロンダに向かつては、自分は絵の専門家でもないくせに、皆の前で彼女の絵をこき下ろした。

「ロンダ、近頃流行の、ポップ・アートなんて真似はやめなさい。君は大学で講座が持てる身分なんだから、もっと真面目な仕事をしなくちゃ駄目だ」

「まあ、フランク、あなたにもっと真面目になれって言われるなんて。わたし、落ちるところまで落ちちゃったと思うしかないわね」

「君は仲々の自信家だけど、自信家すぎて、強情なところがあるよ」

(中略)

「わたしがひっそりと優しい絵をかけば、『少女小説の口絵だ』みたいなことを言うしねえ」

ロンダは嘆息した。⁴¹

つまりフランクも女性に対し思い遣りがなく尊大なことでは、武と五十歩百歩なのである。

ところが半分アジア人で半分白人の血が混じった「桃色シャツ」の男は、とにかく親切でやさしかった。由梨が展示会場でころびそうになると、さっと駆け寄って抱きとめてくれるし、由梨のハイヒールの踵の皮がさけて垂下がっているのを見ると、持っていたナイフでそれを手際よく取り除いてくれ、会場に置き忘れたハンドバッグもみつけて持ってきてくれた。そのようなやさしさを示す男に、武やフランクの思い遣りのなさに傷ついている由梨が惹かれていくのは当然だったといえる。

なおリービは、「桃色シャツ」の男に「由梨が徐々に引かれてゆく（原文ママ）のは、ただの『国際的』な姦通ではなく、むしろ最も「近代的な『会話』の場を逃げた一人の近代人の、自らの前近代的感性そのものとの『姦通』ではなからうか⁴²」といった。これは由梨が彼のエスキモーという部分に自分との血のつながりを感じているとあることかからすれば卓見であろう。

トリンギットというのは、由梨が見に行った民芸品を作った「アラスカ・インディアンの一部族であるが、「桃色シャツ」がその血を四分の一受け継いでいることも、近代人を自任している武やフランクにうんざりしている由梨にとっては望ましい男性像、つまり理想の王子様の一つの要素であった。それは展示場で鴉の帽子をみた由梨が次のように考える場面を見ればわかる。

この鴉の帽子は（中略）写実的な鴉とは似ても似つかぬもので、殊に眼などは抽象化されたにしても人間の、それもかっと見開いた男の眼であったが、全体として見ると、奇妙な、人間と鴉の混同した生命のある面なのである。未開の人種達の間では自然界の木とか草とか、山とか谷とか、動物に人間の同化した生活感情ともいべきものがあり、お互いの意志の疎通は信仰に近い形で信じられているようだ。⁴³

リービは、この「人間と動物の『お互の間の意志の疎通は信仰に近い形で信じられていた』というアニミズムの領域は、すべてが認識の玩具としてもあそばされるブリッジ・パーティーの世界からよほど遠い」といつている。それは確かに卓見である。

しかし私は、この理想的なアニミズムの領域は、由梨にとつてはおとぎ話の世界に踏みいることでもあったことに、注意を喚起したい。そこで「由梨は、人間の祈りや、呪いの、ぶつぶつという低い眩き⁴⁵」を聞くとあるのも、おとぎ話の王女のように由梨が魔法の呪文をかけられたことを意味している。そして呪文をかけられた直後に、流行のロマンティックな色のシャツを着た背の高いハンサムな男に声をかけられるが、このような筋書きも、おとぎ話を踏まえたものである。

このように見ていけば「桃色シャツ」は、由梨が求めているところの近代人でありつつかつまた自然界との結びつきを持った理想の王子様であることが明らかになる。もちろん彼らの関係も、勇敢な王子と可憐な王女の物語のように進展していく。

まず「桃色シャツ」は、すでに指摘したように、由梨が展示場を出ようとして「ぐらりとして危く尻餅をつきそうにな」と、さっと「走りよつてきて、由梨を抱きとめたので、由梨は派手にころばなくて済んだ」し、由梨のヒールの皮が破れて危険なのを見ると、「ポケットからナイフをとり出し⁴⁶」、皮を切ってくれた。物語の王子は王女が危険

な立場にあると剣をふるって助けるが、近代の王子の「桃色シャツ」は、剣の代わりにナイフを使って助けるわけである。靴がとりもつ縁というのも、シンデレラの物語の亜流ないしはパロディ化と読める。そして由梨が展示場にハンドバッグを忘れたまま出てしまうと、「桃色シャツ」はそれを持つてきてくれただけでなく、またしても転びそうになった由梨をやはり抱きとめてころばないようになしてくれた。

その後「桃色シャツ」はジェット・コースターに乗ろうと誘うのだが、注目すべきは、自宅では終始雄弁でかつシニカルな態度しか見せなかつた由梨の変化である。「わたし、怖いわ。若しかしたら、我慢できないかも知れないわ」と弱音をはき、「乗ったことある？」と聞かれると、「ううん」と少女のように「かぶりを振った」ので、「桃色シャツ」は「大丈夫さ。僕につかまっていれば」⁴⁷というわけである。これは由梨が、勇敢な王子に守られる可憐な王女に変身してしまったことを示している。

なおその時由梨は、昔武とデートしている時に、後樂園のジェット・コースターに乗りに行くけど、結局は乗れなかつた挿話を思い出すが、これは武との結婚生活がうまくいかないのは、間違つた王子を選んでしまつたからではないか、と由梨が考えていることを明らかにしている。

そして「桃色シャツ」は、口だけは達者だが頼もしさややさしさに欠ける武とは違い、

ジェット・コースターがスピードをあげ、由梨が怖がると、「由梨の腰に手をまわして、しつかりと抱きしめるように指先に力をこめ」たので、由梨も安心して「男の肩に重心をかけていた」⁴⁸。そしてジェット・コースターがとまると、「桃色のシャツの上に顔を伏せていた」由梨を、「抱きかかえるようにして立ち上らせ、更に抱きよせるように由梨の顔を覗き込」み、「大丈夫？」⁴⁹とやさしく声をかける。由梨の方は、やはり何を聞かれても、「こっくりと頷い」たり、「かぶりをふった」⁵⁰りするだけで、全く可憐な王女様になりきっている。

そしておとぎ話では、王子と王女が舞踏会でダンスをするのも特徴の一つだが、案の定、「桃色シャツ」も由梨をダンスに誘った。

由梨がどうするか決心しかねていると、突然「ドビュッシーか何かの音楽」が聞こえてきて、「オペラ・ハウスから、着飾った観客が」出てき、「黒いスーツの男達が、むき出しの女の肩を覆うように身をかがめて、囁いていた」⁵¹と叙述がある。これは舞踏会のような雰囲気をつくり出すための装置である。

もともと二人は舞踏会には行かず、流行のゴーゴー・ダンスを踊りにいく。そして「スローの曲にな」ると、「桃色シャツ」はおとぎ話の王子のように、由梨をびったり抱き寄せて踊り、「優しく笑いかけ」たので、「由梨も優しく笑い返し」、「二人はただふん

わりと流れていく雲の上ののっているように音楽に任せて」⁵²体を動かしていた。それは「武と上手に踊ろうと努め」、「ステップを間違えまいとからだを硬ばらせた」⁵³時の経験とは大違いであった。

このように由梨がことあるごとに武と「桃色シャツ」と較べているのは、選択を誤つて武を選んでしまったために、自分の人生は上手くいかないのだと考えていることを示唆している。

一方「桃色シャツ」は、終始おとぎ話の王子やロマンティックな恋物語のヒーローのごとく振るまい、踊っている時にも「君はまるで、押えていないと、ふわりと飛んでいってしまう羽みたいに軽いよ」⁵⁴などと、甘いセリフを口にする。むろん武も、そしてフランクも、そのようなロマンティックなことはいわず、やさしくもなかった。だからこそ由梨は「桃色シャツ」に誘われるままにドライブにいき、ついには一夜を共にするのである。この部分はいかにも性の革命の進んだ六十年代的な物語である。

ところが翌朝由梨が眼をさますと、「桃色シャツ」の男はすでに姿を消してしまっていた。しかもバスで遊園地まで戻る途中、由梨はハンドバッグから二十ドル紙幣が消えているのに気がつく。当時の二十ドルといえば、今の百ドルくらいの値打があるが、それを抜き取っていったのは、明らかに「桃色シャツ」であった。ということは、由梨は

素敵な王子様に出会いたいという夢を叶えるために、二十ドル支払ったということに他ならない。

この結末は、構成の上では冒頭におかれているが、そこに含まれるメッセージは次のように解釈することができる。すなわち、おとぎ話は夢物語にすぎず、理想の王子様などいないのだ、だから自分の人生を有意義なものにするためには、結婚幻想を追わず、自分で自分の生き甲斐をみつめていかなければならない、と。

これは決して結婚そのものを否定した結末ではない。このことは、やはり確認しておかなければならない。フリーダムも、結婚幻想に強く影響されている女性ほど結婚した時の幻滅や不満も大きいので、不満を解消するためには自分の生き甲斐をさがすように提案しているが、結婚そのものを排斥しているのではない。

ちなみに時代は大幅に下るが、シャーロット・メイヤーソンも、一九九六年に出版した『*Goin' to the Chapel*』という著書の中で、彼女のインタビューに答えた女性たちのうち、子供の時から女性は結婚すべきだと教えられ、結婚幻想にとらわれていた女性ほど結婚後の人生に失望を持つものが多いと報告している。⁵⁵一方コレット・ダウニングは、一九八一年に出した『シンデレラ・コンプレックス』という著書で、子供の時から物語を通して男性に依存した生き方をすべく教えられた女性たちは、職業上成功しても仲々

心理的に独立できず、男性に依存してしまいがちだと指摘している。⁵⁶

ここでもう少しおとぎ話の問題について言及すると、おとぎ話が女の子たちに結婚幻想を抱かせ、成人しても男性に頼る受け身の生き方を選択させるようになるということが問題にされるようになるのは、実は女性運動が盛んになった一九七〇年代になってからであった。その口火を切ったのは、作家でもあったアリソン・ルーリであるが、ルーリは一九七〇年に発表した論文でおとぎ話は強い女性たちを描いているので、女性解放を推進するのに役立つと力説した。⁵⁷ それに反発し、おとぎ話を批判する論文が続々あらわれるようになり、おとぎ話の研究はフェミニズム運動の一環となっていく。それらの研究は一樣に、おとぎ話が女の子に性別による役割の違いを教え、物語りの王女のように従順で貞淑であれば、王子様と結婚し幸せに暮らすことをできるといって受け身の生き方をするよう書かれたものであることを明らかにした。

そして一九八三年には、ジャック・ザイプスが世界中の昔話や児童文学の研究者に衝撃を与えた『*Fairy Tales and the Art of Subversion: The Classical Genre for Children and the Process of Civilization*』（直訳は『おとぎ話と転覆の芸術——子供のための古典的ジャンルと文明化の過程』だが、二〇〇一年に出た日本語訳は『おとぎ話の社会史』という簡潔な題となっている）を発表した。

ザイプスは古典的おとぎ話は「無害で楽しいもの」と見なされてきたが、それは人々、特に子供たちを教育するために構築されたものであること、そして欧米の主要な古典的作家であるシャルル・ペロー、グリム兄弟、ハンス・クリスチャン・アンデルセンなどは、「ブルジョアジーの価値観や関心を浸透させ、文明的過程でのブルジョアジーの勢力をひそかに強化」⁵⁸したと指摘した。またザイプスは、女の子に対する物語は、家父長制を強化し、維持するために有利な価値観を教えようとするものであり、その伝統はハリウッドのアニメーションにも継承されていると指摘している。

以上のようなザイプスの研究が明らかにしたのは、昔話やおとぎ話の文学化は、特定の価値観を子供たちに教え込むための強力なイデオロギー装置であったこと、そしてこれらの物語りは子供たちの精神世界を支配しただけではなく、成人して後の人々の無意識の領域を形成するまでにいたったことなどである。

このようなザイプスの研究は、結果的にはそれまでのフェミニストのおとぎ話研究を正当化するものであった。

その後もおとぎ話の研究は続けられ、マドンナ・コルベンシユラークは『眠れる森の美女にさよならのキスを』を書き、古典的おとぎ話の家父的価値観を転覆し、女性が主体性をもてるようになる物語を創作していくことの重要性を説いた。⁵⁹

このような歴史を考えるなら、大庭が一九六七年という早い時期に、女性に結婚幻想を与えるものとしておとぎ話に注目し、それを脱構築しようとして試みたことがいかに画期的であったかが理解できるであろう。

そして大庭は、小説の結末部分（構成上は冒頭にある）では、由梨の乗ったバスは深い霧につつまれ、視界があまりきかないといっているが、これは由梨にはまだ自分の進んでいくべき道が見えていないことを示したものであろう。もつともその結末からは、いつか霧が晴れるように、由梨にも自分がやるべきことは何かが見えてくることは予測できる。おそらくロマンティックな男性への対幻想から醒めた由梨は、ロンダと次に会った時には、子供を育てながら働いているシングル・マザーの彼女の寂しさや苦悩を理解し、親密な友情を築き上げていくであろうし、松浦嬢とも、セックスアピールで張り合うかわりに、彼女が米国に一人でやってきて博士号をとろうと頑張っていることを肯定的に評価できるかもしれない。実際に歴史はそうように変化し、女性たちは自分たちの地位を向上させるために共闘していった。

そのような歴史の動きは、一九六七年に大庭が「三匹の蟹」を書いた時点ではまだはつきりとは見えていなかった。だから大庭は、由梨が将来どのように生きていくかについては、明確な解答は与えられなかったのかもしれない。また見方を変えれば、大庭は

深い霧に包まれた孤独な由梨の姿を通して、女性解放運動が広がる直前の孤立した女性たちのあり方を描き出そうとしたといえる。

大庭自身は専業主婦ではなく、結婚しても小説を書くことをあきらめず、夫の転勤を最大限に利用して、アメリカの大学で勉強したりした。しかし主婦業の単調さや、どんなに家事を完璧にやっても仲々充足感や満足感がえられないことも、周りの女性の生活から理解したであろうし、時には自分自身でも感じるものがあつたに違いない。だからケーキを焼きながら苛立つ由梨の姿が生き生きとリアルに描けたのではないかと思われる。また大庭が、自力で子供を育てているアメリカ人女性ロンダ——つまり父親業と母親業と主婦の三役をこなさなければならぬ立場にいる——を深い共感をもって描いたのは、オリガのように離婚して二人の子供を育てていた「フェミニストの先駆者」といえる友人がいたからであろう。

『群像』新人賞の選考委員の一人であつた安岡章太郎は、「三匹の蟹」は「海外留学団地小説」⁶⁰だと評した。それから三十年後に江種満子は、「大庭みな子の文学では、アメリカはたんなる旅先でお客様になる国ではなく、またたんなる情報や題材にとどまるような借りの滞在先・他人の国でもなく、その異文化空間に棲む生活者として、日本女性が自分の生き方を創り出していく闘いの場そのものであつた」⁶¹と評価した。確かに「三

「匹の蟹」も、江種がいうような特徴を備えた作品であるが、そこにはロンダを通して、アメリカ女性の闘いも描かれている。また由梨の造型には、すでに指摘したように、オリガという名を与えられている友人が奨めてくれたフリーダンの本の影響もみられる。そのため由梨は日本人の専業主婦というだけではなく、アメリカの専業主婦の典型としても通用する。言い換えれば、由梨という女性はジェーンというような非日本的な名前に変えても違和感がない存在であり、「三匹の蟹」のボーダレスな魅力の一つもそのような由梨の造型にあるといえる。

参考のため付け加えておけば、私はニュージーランドで「三匹の蟹」を教えているが、その際には、学生たちにフリーダンの『新しい女性の創造』と、カレン・ローの「フェミニズムとおとぎ話」(一九七九)⁶²という論文を参考文献として与える。するとほとんどの学生が、専業主婦である由梨の不満や悩みがフリーダンのインタビュに答えた女性たちの不満や悩みと共通していることを指摘する。中には、六〇年代のニュージーランドでも多くの主婦たちが同じような問題を抱えていたからアメリカと同じように女性運動が広がったのだ、と指摘してくる学生もいた。そしてほとんどの学生が、「桃色シヤツ」がおとぎ話に呪縛された由梨の王子様であり、彼との関係を通して由梨はおとぎ話の世界を再体験しようとするけれども、それは惨めな結果に終わり、男性に頼って生

きていく主体性を欠いた生き方を変革せねばならないことを思い知らされる、これが小説の筋だという分析をしてくる。つまり「おとぎ話」というキーワードがあれば、あまり文学的訓練をうけていない学生でも、「桃色シヤツ」が果たしている役割がわかるわけである。もう一つの収穫は、学生たちがロマンスを描いた小説やハリウッドの映画などが、いかにおとぎ話と同じ家父長的イデオロギーを説いているかにも気づくことである。その意味で、「三匹の蟹」はジェンダー教育に適切なテキストの一つである。

以上のように、「三匹の蟹」は日本人の専業主婦を主人公としているけれども、そこで描かれた問題は、アメリカをはじめ、様々な国の女性たちが直面している問題でもあった。そして女性結婚幻想から抜け出して、新しい生き方を見い出さねばならないという大庭のメッセージも、七〇年代に様々な国に広がった女性運動の発するメッセージと同じであった。「三匹の蟹」のボーダレスな魅力の一つもこの点にあるといえる。「三匹の蟹」がボーダレスな魅力を持つもう一つの要因は、おとぎ話やロマンティックな恋愛小説の説く結婚幻想に挑戦し、それを脱構築したことであるが、欧米のフェミニニストの間でおとぎ話の研究がはじまるのが七〇年代になってからだということを考えるなら、大庭がそれを一九六七年という早い時点でおこなったことは、革新的であったといわねばならない。また二項でふれたように、大庭がアメリカ在住の日本人のみに焦点を

あてず、フランクやロンダ、そして「桃色シャツ」の男などを通して、一九六〇年代にアメリカ社会でおきていた結婚や性に関するモラルの変化を描いたことも、「三匹の蟹」をそれまでの日本文学の枠を越えたボーダレスな魅力をもつ作品にしているのではないかと思う。

注

- 1 江種満子『大庭みな子の世界』（新曜社、二〇〇一）17頁。
- 2 同上17頁。
- 3 同上80頁。
- 4 柄谷行人「大庭みな子と『アラスカ』（『大庭みな子全集 第九巻 月報9』、講談社、一九九二）2頁。
- 5 リービ英雄「解説 『三匹の蟹』ふたたび」（大庭みな子『三匹の蟹』、講談社、一九九二）、302—3頁。
- 6 同上303頁。
- 7 Moody, Rick. *The Ice Storm*. London: Little, Brown and Company (UK), 1994.
- 8 ニュージールランドでは一九七〇年代になって中絶が法律でも認可されたが、しかしキリスト教的価値観が残っているので、現在でも中絶を受けたい女性が中絶後心理的な障碍を起こさないよう、中絶の前にはカウンセリングを受けることになっている。カウンセリングはキリスト教原理主義者を中心とした妊娠中絶反対派の手厳しい非難を緩和するためにも採用された制度でもある。私は一

度病院の要請で、中絶を受けたという日本人女性の通訳をしたことがあるが、その女性が自分はまだ子供が欲しくないので中絶を受けただけなのに、なぜカウンセリングのようなややこしい手続きを踏まねばならないのかと怒っていた。それで日本人とキリスト教圏の中絶に対する考えの相違を知った。

9 角川書店編集部編・筑紫哲也監修『Our Times 二〇世紀』（角川書店、一九九八）514頁。

10 『週刊二〇世紀 一九九七 昭和四二年』永栄潔編（朝日新聞、一九九九年七月二五日、通巻25号）3頁。

11 同上515頁。

12 同上6頁。

13 『週刊二〇世紀 一九九七 昭和四二年』3頁。

14 同上3頁。

15 忘れてならないのは、若者たちはファッションや性の解放を通して既成の文化に叛旗を翻したただけではなく、ベトナム反戦運動や学園の民主化を求めた政治運動を展開し、アメリカ社会に揺さぶりをかけたことである。それはむしろアメリカだけの現象ではなく、日本でもヨーロッパでも、そしてニュージールランドやオーストラリアなどでも起こった。結局彼らは武力をまじえた権力の側の抵抗に遭って、それまでの政治体制をくつがえすことはできなかったが、既成の価値観が疑問視されるようになっていく契機をつくったことは見逃してはならない。

16 『大庭みな子全集 第一巻』45頁。

17 『群像』二〇〇二年一月号に掲載された大庭みな子の「アラスカ再訪」によれば、大庭自身もポ

ーランドからの移民である友人のミーチャヤ、チコ、ピョン・ワン・リー、「桃色シャツ」などの男性たちと性的関係があったことを明らかにしている。

18 同上11頁。

19 江藤淳「選評 未知数のすご味」〔群像〕、一九六八・六 115頁。

20 大江健三郎「選評 新しい作家・批評家に何を望むか?」〔群像〕一九六八・六 117頁。

21 『大庭みな子全集 第一巻』(講談社、一九九〇) 30頁。

22 この部分の日本語訳は原文と相違するので、私自身が訳した。Friedan, Betty. *The Feminine Mystique*. Maryland, 1963. p.19.

23 ベティ・フリーダン『新しい女性の創造』三浦富美子訳(大和書房、一九七〇) 18頁。

24 『新しい女性の創造』189頁。

25 『朝日ジャーナル』(一九七〇・五・一〇) 104頁。

26 同上105頁。

27 同上105頁。

28 これは訳者三浦富美子が、第十三章のまとめとして記したものであるが、優れた要約である。
〔新しい女性の創造〕、225頁。

29 ここに記した大統領、副大統領の発言、そしてカッコ内の情報は、すべて『新しい女性の創造』の増補版に三浦富美子がつけた解説の中から転載した。ただし「婦人」とあるところは“women”の日本語訳なので、「女性」という語で統一した。『増補新しい女性の創造』三浦富美子訳(大和書房、一九七七) 305頁参照のこと。

- 30 『大庭みな子全集 第九卷』（講談社、一九九二）409頁。
- 31 『大庭みな子全集 第一卷』15頁。
- 32 同上14頁。
- 33 同上15頁。
- 34 同上38頁。
- 35 同上38頁。
- 36 同上12頁。
- 37 同上13頁。
- 38 同上24頁。
- 39 同上26頁。
- 40 同上26頁。
- 41 同上32頁。
- 42 同上35頁。
- 43 同上35頁。
- 44 リービ英雄「解説 『三匹の蟹』ふたたび」（大庭みな子『三匹の蟹』、講談社、一九九二）304頁。
- 45 同上35頁。
- 46 『大庭みな子全集 第一卷』35—36頁。
- 47 同上40頁。
- 48 同上41頁。

- 49 同上41頁。
- 50 同上41、42頁。
- 51 同上43頁。
- 52 同上45頁。
- 53 同上45頁。
- 54 同上46頁。
- 55 Mayerson, Charlotte. *Goin' to the Chapel*. New York: Harper Collin Publisher. 特に第二章
 “GROWING UP MEANS GETTING MARRIED”を参照(57頁)。
- 56 日本語訳は、コレット・タウニング『シンデレラコンプレックス』柳瀬尚紀訳(三笠書房、一九
 八五)。
- 57 Donald Haase “Feminist Fairy-Tale Scholarship: A Critical Survey Bibliography”, *Mammals &
 Tales* volume 14, number 1, 2000. P. 15.
- 58 ジャック・ザイプスの著書についての項は、『おとぎ話の社会史』鈴木晶・木村慧子訳(新曜社、
 二〇〇一)25、35、37、92、94、167、185、246、277頁などから要約した。
- 59 マドンナ・コルベンシュラーグ『眠れる森の美女にさよならのキスを』野口啓子・野田隆・橋本
 美和子訳(柏書房、一九九六)。
- 60 安岡章太郎「選評 恐るべき女流」『群像』一九六八・六 120頁。
- 61 江種満子『大庭みな子の世界』76頁。
- 62 Karen E. Rowe “Feminism and fairy tales”, *Women's Studies* vol. 6, no. 3, 1979.

発表を終えて

日文研で研究をはじめた時、私は二つの研究テーマをもっていました。一つは60年代の文学ではどのようなファンタジーが紡がれたのかを調べることで、もう一つは三島由紀夫がどのような経緯でテロルという行動に出たかでした。しかし間もなく9月11日の同時多発テロが起きたので、三島とテロリズムの研究に専念することにしました。しかし日文研フォーラムでは、明るい話題について話したかったので、1968年に『群像』新人賞と芥川賞をとった大庭みな子の「三匹の蟹」を選びました。アメリカに住む日本人の専業主婦を主人公にした「三匹の蟹」は、ミニスカートが流行した時代の文化的変化や男女関係の変化をよくとらえた作品であるだけではなく、シンデレラなどの童話が教えるモラル観を変えようとする意欲的な作品です。それでフォーラムに出席される方々にも楽しんでいただけるのではと思ったからでした。

フォーラムの出席者は、ミニスカートの時代に青春時代を過ごされた方が多かったので、大変参考になるご意見もいただきました。また司会の鈴木貞美教授からは、男性の視点にたった挑戦的なご意見をいただき、刺激を受けました。申し訳ないことに、『三島由紀夫とテロルの倫理』という本を書き上げるのに時間がかかって、日文研フォーラムでの講演の原稿を推敲するのが非常に遅れ、担当者の方々には大変ご迷惑をおかけしてしまいました。日文研滞在中は、研究に専念できただけでなく、様々な分野の専門家であるスタッフの皆さんにもいろいろとご教授いただき、私の研究生活で最高のときを過ごしました。図書館の方々、そして研究協力課の篠原、奥野、佐々木さんにも非常にお世話になりました。改めてみなさんに感謝の意を表させていただきます。

Chigusa Kimura - Steve

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩1	9.11.11	<p>KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シヨ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」</p>
⑩2	9.12. 9	<p>ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」</p>
103	10. 1.13 (1998)	<p>KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」</p>
⑩4	10. 2.10 (1998)	<p>GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者—休宗純とその文学」</p>
105	10. 3. 3	<p>シュテファン・カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」</p>
106	10. 4. 7	<p>スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」</p>
107	10. 5.19	<p>リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」</p>
⑩8	10. 6. 9	<p>Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」</p>

⑩	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑬	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑭	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑮	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑯	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8	マリ ア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫①	11. 7.13	R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫②	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫③	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫④	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫⑤	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑥	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑦	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレーンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ベッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

129	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
130	12. 6.13	ケネ ス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
132	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
138	13. 4.10	LI Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
139	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⑩	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑭⑪	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
⑭⑫	13.12.11	チグサ キム ラステイーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑬	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑭	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」

150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光潯 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禪心理学的生命観」
151	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Milim 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RÜTTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
155	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビッド L. ハウエル David L. HOWELL (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件顛末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』—富岡鉄斎を読む—」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA (米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員) 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑩	15. 4. 8	ビル スウ エル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	Park JeonYull 朴 鎰烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林 容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	БОЙКА ЭЛИТ ТЦИГОВА Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	ИНГЕ МАРИА ДАНИЕЛС Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑪	15.10.14	WANG Cheng 王 成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑫	15.11.11	CHEN Hui 陳 暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家 成瀬仁蔵のアジアへの影響—家族改革をめぐって—」
167	15.12. 9 (2003)	ЕВГЕНЕЕВ С. БАКШЕЕВ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所 沖縄県宮古諸島の聖地・場所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔 周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑬	15. 5.11 (2004)	КОНСТАНТИН НОМИКОС ВАПОРИС Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

170	15. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王 述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
171	15. 7.13 (2004)	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿—『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	15. 9.14 (2004)	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科 助教授) 「セールスマンの死 : サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	15.10.19 (2004)	SE YIN 色 音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	15.11. 9 (2004)	LEE HanSop 李 漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科 教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	15.12.14 (2004)	アレクサンダー マーシャル ヴェーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学 助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	16. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学 シニア・レクチャーラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫—戦後の原点」
177	16. 2. 8 (2005)	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学 助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ... 芥川龍之介「歯車」、ストリンドベリ、そして狂気」
178	16. 3. 8 (2005)	WU WUYangmi 呉 咏梅 (北京日本学研究センター 専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通—中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2005年3月31日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

© 2005 国際日本文化研究センター

■ 日時
2001年12月11日（火）
午後2時～4時

■ 会場
国際交流基金 京都支部

第14回 大塚女子大学女子部「舞」の歴史

大塚女子大学女子部「舞」の歴史は、1950年代から始まり、現在まで約70年続いています。

この歴史は、大塚女子大学の発展と共に歩み、学生たちの情熱と努力の結晶です。

ここでは、その歩みと変遷について詳しくご紹介します。

1950年代の始まりから、1960年代の成長期、そして1970年代以降の発展まで、

大塚女子大学女子部「舞」の歴史を振り返ります。

大塚女子大学女子部「舞」の歴史は、学生たちの情熱と努力の結晶です。

ここでは、その歩みと変遷について詳しくご紹介します。

1950年代の始まりから、1960年代の成長期、そして1970年代以降の発展まで、

大塚女子大学女子部「舞」の歴史を振り返ります。

大塚女子大学女子部「舞」の歴史は、学生たちの情熱と努力の結晶です。

ここでは、その歩みと変遷について詳しくご紹介します。